空間・社会・地理思想 21 号，29-35 頁，2018 年
Space, Society and Geographical Thought

ホームの地理学とセクシュアリティの地理学が出会うとき
――近年の研究動向に関する覚書――

福田　珠己 *

Tamami FUKUDA

Research Trends of Geographies of Home and Sexualities

Ⅰ　はじめに

2017年12月末，証明書交付 1 号の同性パートナーが関係解消したと報じられた[1]．いわゆる同性婚の可視化を牽引したパートナーとはいえ，パートナーとしての関係解消という個人的な出来事が報道の対象となっていることは，同性パートナーの公的認定が日本社会においてはまだ数少ない事例であることを物語っている．実際，証明書交付1号の同性パートナーが誕生したのは2015年のことであり，同年成立した「渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」に基づいて「パートナーシップ宣言書」が交付されたのである．その後，世田谷区，伊賀市, 宝塚市, 那覇市, 札幌市で同様の制度が始まっている．職場や学校など公的空間における不平等解消だけでなく，家庭生活にかかわる関係性においても，異性愛以外のセクシュアリティを包摂する方向に社会が動きだそうとしていることは明白である．このようないわゆる「同性婚」の是認は，世界的な流れでもある．「同性婚」といってもその制度は一様ではなく，大別すると，同性同士の婚姻関係を異性同士の婚姻関係と法律上も同等とする方法と，異性結婚の夫婦に認められる権利の全部もしくは一部を同性カップルにも認める方法が見られる．制度の違いはあれ，21世紀に入り，多くの国々で，「同性婚」が認められるようになってきているのである．

もちろん，パートナーと共に生きることは公に認められた「同性婚」という形に限定されるものではない[2]．しかしながら，非異性愛「家族」の形成に照準をあてた社会の動きは活発化し，同時に，多様な形のパートナーが形成するホームや家庭生活についての関心は研究のレベルでも高まってきている．例えば，日本では，家族社会学において，家族の関係性や制度を非異性愛の視点から問い直す作業が行われるようになっている（例えば，釜野 2008, 2009; Kamano 2009）．ホームの地理学研究においても，その変化は顕著なものである．筆者は，すでに，ホームの地理学研究についてのレビューを行ったが（福田 2008），そこでレビューした研究動向は，いずれも世紀転換期までのものであり，フェミニスト地理学と文化地理学の新たな動きが重なり合うところにホームの地理学を位置づけ，その可能性について論じるに留まっている．そこでは，すでに萌芽していた動き，すなわち，ホームという場所／空間／関係性が暗黙のうちに前提としてきた異性愛規範に挑むような視点に光を当てることができなかったのである．

しかしながら, ホームの地理学研究は, 拙稿（2008）でレビューした20年ほどの期間にのみ高まりを見せたものではない．その後も，着実に研究が蓄積されており，異性愛以外のセクシュアリティに照準をあてた研究も増加している．本論では，その後，ホームとセクシュアリティに関する英語圏の地理学研究がたどってきた動向を整理し，更なるホームの地理学研究の可能性を探ることを目的とする．

Ⅱ　ホーム／ジェンダー／セクシュアリティ

1. フェミニスト地理学におけるホームの研究

Alison Blunt（2005）は，平凡で誰にとっても馴染みあるものと捉えられであった対象を問うことによって，ホームや家庭空間についての議論が大いに展開されるようになったと世紀転換期の研究動向について指摘している．同じ*Progress in Human Geography*誌に，フェミニスト地理学者たちが等閑

*　大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科

視されてきたホームや家庭空間について検討・主張し始めたとMona Domosh（1998）が述べたことから考えると，急激な，そして大きな変化がホームの地理学にもたらされたのである．地理学雑誌の特集号やホームに関する学際的雑誌の発行はそのようなうねりを支え，また，BluntとRobyn Dowlingによる入門書（Blunt and Dowling 2006）は，ホームの地理学研究の裾野をさらに広げていった[3]．

ホームの地理学研究は1つのサブ・ディシプリンを形成するものではないが，この時期に展開された研究には共通点がある[4]．それは，公／私の二項対立的な位置づけを覆そうという点である．私的なるものとして研究対象とされてこなかったホームに光をあてるだけでなく，ジェンダー化された二項定立的な思考そのものを問題視し，それを乗り越えようとしたのである．研究内容は多様なものであるが，BluntとDowling（2006）は次のような特徴をあげている．すなわち，①公的なるもの，私的なるものの双方を通して構成される，交差する領域として，②公私の交差の仕方が時間・空間によって異なるものとして，③抑圧と抵抗の場として，④多様な生きられた経験の場として，⑤概念的にも隠喩的にも経験的にも可変性を有するものとして，⑥流動的なものとして，⑦物質的であると同時に想像的なものとして，⑧アイデンティティや権力とかかわるものとして，⑨マルチ・スケールで常に開かれたものとして，ホームは探求されるのである．

このような方向性は，2017年に出版された*The international encyclopedia of geography*におけるホームの説明（Blunt 2017）にも踏襲されている．前述の9つの点に加えて強調されるのは，行動志向型の研究が有する可能性である．Blunt（2017）は自らもかかわるロンドンのジェフリー博物館（The Geffrye Museum of the Home[5]）での活動について言及している．また，Katherine Brickell（2012）もまた，私的なものとみなされてきたホームにかかわる問題を可視化し，公的領域にとつなげていくことに寄与した諸実践について言及し，ホームの批判地理学を実行することの重要性を指摘している．

しかしながら，ジェンダー，階級，年齢，セクシュアリティ，人種，宗教という観点から，包摂と排除，所属，不平等と関わるアイデンティティの政治性について研究する際に，ホームは重要な場となるといわれながら（Blunt 2017），奇妙なことに，ホームの地理学研究を解説・展望する際，セクシュアリティへの言及は前面に表れてこない．Lynda Johnston（2016）は，フェミニスト地理学研究は数十年にわたって二項対立的思考を覆そうとしてきたにもかかわらず，ジェンダーの二分法から完全には自由になっていないと指摘している．ジェンダーだけでなく多様なセクシュアリティを問うことによって，はじめて，主体の安定性／不安定性について洞察することができるというのである．Johnstonの指摘は，フェミニスト地理学の影響を受けて展開されるようになったホームの地理学研究においてもあてはまるものである．

2. セクシュアリティの地理におけるホームへの接近

一方，セクシュアリティの地理学研究においてホームはどのように位置づけられていたのだろうか．人文地理学全般の動向と同様，セクシュアリティの地理学研究においても，ホームや家庭生活が研究対象とされるのは最近のことである．Nathaniel M. Lewis（2017）が簡潔に説明しているように，ゲイ・ライツ・ムーブメントから十数年後の1970年代後半から1980年代にかけて，セクシュアリティの地理への関心は，主として，ゲイ（やレズビアン）による都市空間の利用に関する研究からはじまった．その時期，サンフランシスコ，ニューヨーク，アムステルダム，ベルリンやパリといった欧米の都市において，ゲイ（やレズビアン）の存在が可視化され，それにつれて，都市におけるゲイ地区へのアカデミックな関心も高まったのである．そこに生きる非異性愛者の社会的，経済的，政治的な生活において，特定の地区の重要性が注目されるようになり，また，ジェントリフィケーションと関連付けてセクシュアリティの地理が探求されるようになったのである．

その後，1990年代になると，セクシュアリティと空間に関する研究は，フェミニスト地理学にとって不可欠な領域となり，クィア理論に影響をうけた研究も志向されるようになった（Johnston 2017）．多様な，そして，流動的なジェンダーやセクシュアリティが存在することを前提として，ジェンダー，セックス，セクシュアリティの関係を問い直し，セクシュアリティと空間を社会的プロセスとして理解するような研究が行われるようになった．二項対立的な枠組みを超えた身体と場所との関係，行為遂行的かつ物質的に形成され続けるセクシュアリティの地理に焦点があてられるようになったのである．

David BellとGill Valentineの編著*Mapping desire*（1995）は，この時期のセクシュアリティの地理が向かおうとしていた方向をよく示すものであり，現在もなお，この分野における理論的展開の基礎となる論集である．「（複数の）地図／（複数の）アイデンティティ」「性

化された空間」「性化された場所」「抵抗の場」と4つのセクションから構成されているが，全体を通して，「同性愛(者)の」とセクシュアリティを固定化するのではなく，異性愛，バイセクシュアルにかかわる問題を含む流動的で多様なセクシュアリティと空間にかかわる研究を目指したのである．*Mapping desire*では，ホームもまた重要な位置を占める．Lynda JohnstonとValentine（1995）は，ニュージーランドと英国において両親と住むレズビアンのホームに関する経験について調査し，どのように自分自身の家庭生活環境を創造し，そのなかで苦労してやってきたのか考察している．その際に，その後の研究においても重要な概念となる行為と監視に注目していることも特筆すべきである．ホームに関するこの論文に加え，論集では，冒頭部において，ニュージーランドにおけるJohnstonの研究から2つの図を引用して，ホームに関する議論が展開されている（Bell and Valentine 1995:1-3）．図の1つは「ファミリー・ホーム」であり，壁で仕切られてはいるが，レズビアンやゲイにとっては監視と規律の空間，異性愛規範の空間として表現されている．もう1つはレズビアンやゲイが「家族のふりをした」ホームーレズビアンカップル，ゲイ男性カップルと乳幼児とペットからなるホームーで，シェルターとしての小さな屋根の下，個々人の身体がホームを形成しているかのように描き出されている．これら図においても，監視，行為遂行性，身体といったホームをめぐる重要な論点を導き出すことができよう．

*Mapping desire*は，その後のセクシュアリティとホームに関する研究の先駆けと位置づけることもできる．抑圧や監視の場として，自己のアイデンティティを確立し表現する場として，ホームが研究対象とされていく（Browne and Brown 2016）．しかしながら，実際に，セクシュアリティとホームに関する地理学研究が活発化するのは，2000年を越えてからのことである．次章では，どのような研究が行われきたのか提示し，その特徴を探る．

III　ホームとセクシュアリティの地理学

1. 学際的研究のなかで

ここでは，表象，物質，概念としてのホームが，学問分野を越えた密接な関係のなかで研究されてきたことに注目する．そのなかでも，学際的なホーム研究の場として拙稿（2008）においても言及した*Home Cultures*誌を取り上げたい．2004年，自己，ジェンダー，個性，家族，社会関係から，建造環境，公私の二元論的位置づけ，労働，都市，社会生活といったより広い領域に至るまで，人間存在の多様で本質的な様相を理解することができる場としてホームを位置づけ，学問分野の垣根を越えた研究をめざして，この雑誌は創刊された（Buchli, Clarke and Upton 2004）．創刊号の編者が，物質文化研究のVictor Buchli，デザイン史・社会人類学研究のAlison Clarke，建築，物質文化，都市の史的研究を行うDell Uptonであることも，同誌のその後の展開，すなわち，マテリアリティを強く意識したホームの研究を物語っている．

*Home Cultures*誌にセクシュアリティに関する研究が掲載されたのは，2006年のことである．地理学研究者Andrew Gorman-Murray（2006）による研究で，ゲイやレズビアンのカップルがホームにおいていかにカップルとしての関係を確立していったのか，オーストラリアにおけるインタビュー調査から明らかにしている．Gorman-Murrayは，ホームを異性愛規範的で同性愛者を排除し遠ざける場所として捉えるのではなく，同居する同性愛カップルが物質的にホームを作る実践を通してアイデンティティの共有に到る場所として考察している．その際，議論の軸となるのは，パートナーシップを可能とする家庭内でのプライバシーと管理の重要性，家庭空間を共に形成し使用する際の交渉，家庭生活空間における物質の配置，よい関係を維持していくために不可欠な個人的空間がもつ重要性である．

続いて掲載されたのは，トランスウーマンのために当事者がブルックリンに開設した共同体ホームTransy Houseに関する環境心理学者Kim D. Felsenthal（2009）の研究である．アイデンティティ形成と物質的な室内の環境に関する詳細な調査から論じられるのは，トランスケープ（transcape）と称する景観である．トランスケープとは，Arjun Appaduraiによるエスノスケープ（ethnoscape）に派生するものであり，使用者が制御し，行為やジェンダーの表現においてトランスジェンダーであることを規範とすることを促し，トランスジェンダーとしてのアイデンティティを表明し強化できるような物理的環境を巧みに操ることのできる景観である．

いずれの研究も，ホームとアイデンティティに焦点があてられているが，本質的なものとしてではなく，形成されていくプロセスとして，アイデンティティやそれにかかわる物質的環境やその形

成が重要視されている．また，Gorman-Murrayはその後も*Home Cultures*誌におけるセクシュアリティ研究で活躍する．2014年には，自然災害とLGBTの経験－移転やホーム喪失といった経験―について共著で発表している（Gorman-Murray, McKinnon and Dominey-Howes 2014）．

さらに，2015年には，Gorman-Murrayは建築学のBrent Pilkeyや社会人類学のRachael M.Scicluna と共に，特集号Alternative domesticities: A cross-disciplinary approach to home and sexualityを編集している．この特集号は，学際性を保ちながら，ホームや家庭生活のもつ異性愛規範的なイデオロギーを揺るがし，レズビアン・スタディーズ，ゲイ・スタディーズ，クィア・スタディーズにおける関心を公的空間や共同体から家庭空間へ転換していくことを目的としている（Pikey, Scicluna and Gorman-Murray 2015）．特集号には，編者らによるイントロダクションに続いて5つの論文が収められている．Alice T. Friedman（2015）は，20世紀はじめニューイングランドに，詩人で文学者であるKatharine Lee Batesがパートナーである社会経済学者で労働運動家のKatharine Comanと暮らすために建てた住まいThe Scarabについて論じた．編者でもあるScicluna（2015）は，ロンドンに住む高齢レズビアンの生活経験についてキッチンに対する記憶から考察する．そこで経験され語られる記憶は，キッチンという家庭内の空間に限定されるものではなく，文化，社会，親類関係，政治といったより広い概念と結びついているのである[6]．Carla Barrett（2015）は，レズビアンやゲイのカップルが家事労働をどのように理解し分担しているのか調査し，家事や子育てに対する態度やかかわりを通して，それらカップルがどのように家事に関する異性愛規範的な前提を転覆させていることを明らかにした．また，編者のPilkey（2015）は，ステレオタイプ化されたゲイ男性美意識を前提としたRobin Williamsのジョーク[7]から始まる論文において，インテリアに関する美意識と現実の生活との緊張関係について考察し[8]，Carin Tunåker（2015）は社会人類学の視点から家族から疎外されホームレスとなっているLGBTの若者について調査考察している．

特集号には地理学研究者の論考が掲載されているわけではない．しかしながら，近年，文化地理学において隣接分野の諸理論と関係しながら展開されてきた理論――とりわけ，行為遂行性やマテリアリティに関する議論――と重なり合っていることは明白である．ホームの研究が初期の段階から物質と表象，行為を軸として展開されてきたこと，また，フェミニスト理論に影響を受けてきたことから考えると当然のことなのかもしれない．

2. レズビアンの地理とホーム

これまで言及した研究を振り返ると，レズビアンの経験に基づく論考が多いことに気がつく．先駆的なJohnstonとValentine（1995）の研究もレズビアンにとってのホームを論じたものであり，また，著者の1人Valentine（1993）は日常空間に対するレズビアンの知覚と経験に関する考察のなかで，ホームにおけるアンビバレントな感情と経験について触れている．ここでは，レズビアンの地理に関する研究潮流のなかで，ホームへのアプローチについて概観していく．

1990年代以降セクシュアリティの地理に対する関心が高まる一方，レズビアンの地理をテーマとした雑誌特集号は現在に至るまで2度編まれたに過ぎない．2000年に*Journal of Lesbian Studies*誌の特集号From nowhere to everywhere: Lesbian geographiesがGill Valentineによって編集され，2007年に*Social & Cultural Geography*誌の特集号Lesbian geographiesがKath Browneによって編集されている．

Valentineによる特集号のタイトルは，レズビアンの置かれた状況を巧みに表現している．Valentine（2000a）によるイントロダクションは，どこにも実在しない存在からどこにでもいる存在へとレズビアンが可視化されるようになってきたことが，空間の問題であり，それを研究する視点の問題であるということから始まる．レズビアンは，都市にも田舎にも，異性愛的な空間とみなされてきた日常生活空間にも，どこにでもいる．その一方で，同性愛者の社会的政治的文化的景観を論じる際，初期の研究においては，わずかな例外を除くと，ゲイ男性の生活，特に，都市におけるゲイ男性の生活に特化していたというのである．このような動向についてはII章でも触れたとおりであるが，Valentineは，ゲイ男性と比較するとレズビアンは領域を伴うようなコミュニティを形成しないというManuel Castells（1983）による前提とそれに対する反論に言及し，レズビアンのセクシュアリティと空間との関係に指摘している．Castellsの前提と異なり，レズビアンも空間的に集中したコミュニティを形成しているが，それは，レズビアン家庭が集まっていたり，オルタナティブな書店や協同組合店舗を含んでいたりする近隣地区だというのである．すなわち，商業的なバーや施設などが集まる誰の目にも明らかな地区を形成していないだけだというのである．このようなレズビアン・

コミュニティが持つ空間的な特徴を，Browne（2007）は地図化できるか否かという点から説明している．それは，俯瞰されるものではなく，口伝えにネットワークのなかで見出されていくものなのである[9]．

このような点から位置づけると，ホームはレズビアンとしての関係性を築く核となる場所となる．ホームは，一方では，レズビアンの身体が安定性をかき乱すものとして排除される異性愛規範的な空間であるが，他方では，外からの視線を遮断して自らのセクシュアリティを表現できる所属の場でもある．*Journal of Lesbian Studies*誌の特集号においても，ホームへの所属にかかわる研究が見られる．Sarah A.Elwood（2000）はミネアポリス・セントポール都市圏における調査から，自由と愛着，抑圧と監視の場としてホームという場所を論じ，Valentine（2000b）は自らが受けた同性愛嫌悪ハラスメントについて，両親の住む家，自らの住む家，地理学界という本拠地に触れながら問題提起している．

3. オーストラリア，ニュージーランドからの発信

日本の地理学研究では，英語圏地理学をひとくくりにする傾向がある．本論でも，英語圏のセクシュアリティとホームの地理に関する研究の動向について，一連のものとして整理してきた．その過程で，研究の地域性を主張する雑誌特集号に出会った．2008年，*Australian Geographer*誌に掲載された特集Geographies of sexuality and gender ‘Down Under’で，編者はGorman-Murray, Johnston とGordon Waittである．編者のイントロダクション（Gordon-Murray, Waitt and Johnston 2008）によると，セクシュアリティとジェンダーの地理に関して，オーストラリアやニュージーランドは，研究者の面でも事例研究の面でも周辺化されているというのである[10]．1998年の特集Gendered geographies in Australia, Aotearoa / New Zealand and the Asia-Pacificに続くこの特集では，オーストラリア／ニュージーランドを基盤としたセクシュアリティとジェンダーに関する地理学研究の動向を示すこと，セクシュアリティとジェンダーについての議論にオーストラリア／ニュージーランド固有の視点を明示し，それら議論が他のテーマと同様にどのように関係しあっているのか明らかにすることを目的としている．

このように差異を主張する際，Gordon-Murrayらは，セクシュアリティに関して，国家間で社会的政治的状況に大きな違いがあると主張する．オーストラリアというとシドニー・ゲイ・アンド・レズビアン・マルディ・グラ（Sydney Gay and Lesbian Mardi Gras[11]）が国際的にも有名であるが，同性愛に対する規制は英国などと比べると最近まで厳しく，2004年の段階でも，男女間の婚姻のみが認められ，また，同性カップルは法的な養子縁組も禁止されていたというのである．すなわち，社会や家族をめぐる異性愛規範が強く，また，国家によってその規範が強化されていたのである．

この特集号には12の論文が掲載されているが，そのうち3つはホームに関する論考である．Gorman-Murray（2008a）は，男性性とホームについてのレビューを行ったが，そこで言及されているのは，異性愛的男性主義的家庭生活（すなわち，異性愛規範的なホーム）とゲイの家庭生活に加え，独身男性のホームである．Sue Kentlyn（2008）はクィーンズランド州南東部に住むゲイやレズビアンのカップルに対する調査において，ホームをつくる行為，すなわち，カップルや家族であることを実践する方法として家事を位置づけ，同性愛者のホームが常に周囲の人やパートナーから詮索されるものであることを論じた．Karina Luzia（2008）が取り上げるのは，シドニー郊外のマリックヴィルにあるチルドレン・センターで起きたモラル・パニックである．ゲイ両親を持つ少女を主人公にした絵本*Koalas on Parade*[12]が配架されたことから起こったモラル・パニックは，物理的象徴的な衝突が空間との関係から解釈されるべきであることを明確にし，また，セクシュアリティやホームの地理という点においても興味深い知見を示す．これらの研究は，直接的に，オーストラリアとそれ以外の英語圏の研究の差異を示すものでも，その特徴を主張するものでもない．しかしながら，いずれの論文においても，ホームの異性愛規範やそこからの逸脱について批判的に論じるという意図が見られる．

オーストラリアを基盤としたホームとセクシュアリティの地理に関する研究はこの特集号に限定されるものではない．それらを一覧していると，Andrew Gorman-Murrayの膨大な研究蓄積に気がつく．例えば，ゲイやレズビアンの家庭生活における行為や経験に関する研究において，郊外において異性愛的な空間として理想化されたオーストラリアのホームをクィア化について論じたり（2007），支援になってくれる家族のもとでカミングアウトするLGBTの若者とホームについて報告したりしている（2008b）．また，2017年には，学際的な共著であるが，ホームの内部を精査検討する*Queering the interior（home）*も出版している（Gorman-Murray and Cook 2017）．Gorman-Murrayの研究は，新しい理論を提示するも

のであると必ずしも言えない．しかしながら，圧倒的な量でその存在感を示していること，オーストラリアを基盤にしていること，さらには，男性性にも焦点を当てていることを考えると，今後，セクシュアリティとホームの地理を論じる際に，通り過ぎることのできない研究であろう．

Ⅳ　まとめにかえて

本論は，拙稿(2008)で欠落していたパーツを探すことから始まった．しかしながら，それは小さな欠落ではなく，セクシュアリティの地理という大きな流れのなかでホームを捉えなおす作業となってしまった．現状では，まだ全貌を明らかにすることはできず，暫定的なまとめに留まっているが，いくつかの論点を提示することができた．第1に，拙稿(2008)でレビューしたホームの地理学研究の問題意識を継承していることである．学際的な場で研究が行われていることも同様である．第2に，セクシュアリティの地理学研究がその進展のなかでホームへもアプローチするようになったことである．第3に，レズビアン地理学が果たす重要性である．第4に，セクシュアリティとホームの地理に関する研究において，国や地域の違いにも注意を払う必要があることである．このことはフェミニスト地理学の場合でも同様であるが，運動や社会における制度化の相違と密接にかかわっているのである．

本論はホームとセクシュアリティの地理学を入口からのぞいたに過ぎない．取り上げた個々の研究の背後にある思想的な流れにも留意した展望を試みると同時に，日本における諸制度や社会の動向も踏まえた考察も推進していく必要があろう．

付記

本研究は科学研究費基盤研究(B)「課題番号17H02430(代表者：福田珠己)」，同・挑戦的萌芽研究「課題番号16K13298(代表者：吉田道代)」の研究成果の一部である．

注

1) 「同性パートナー　関係解消」『朝日新聞』2017年12月28日朝刊.
2) 非異性愛家族の形成をめぐる議論については，例えば，河口(2003)を参照.
3) 日本の地理学においても，ホームや「場所」を論じる際に，しばしば言及される文献となっている．最近の研究では，例えば，陳(2017)も同書を援用しつつ，在日中国人女性のホームについて論じている．
4) それ以前の動き，すなわち，人文主義地理学におけるホームという場所に関する洞察については，拙稿(2008)で言及しているので本論では触れない．
5) 1714年に救貧院として建設された建物は，1914年から博物館として利用されている．近年は，同博物館とQueen Mary University of Londonが運営するthe Centre for Studies of Homeの拠点として，学際的で，かつ，アカデミズムと実践者が協働する活動を推進している．
6) 一連の研究は，著書*Home and sexuality: The 'other' side of the kitchen*(Scicluna 2017)としてもまとめられている．
7) Robin Williams は日本でも有名な俳優・コメディアン(故人)．ジョークの内容は以下のとおりである．"We had gay burglars the other night. They broke in and rearranged the furniture."
8) 同様のテーマで*Gender, Place and Culture*誌でも論文を発表している(Pilkey 2014)．
9) 例えば，Wincapaw(2000)はレズビアンやバイセクシュアル女性がメーリングリストを介して築く関係性，すなわち，バーチャルな空間について論じている．
10) セクシュアリティと空間に関する具体的な研究動向については，JohnstonとRobyn Longhurst(2008)も参照のこと．
11) 1978年のデモ行進にはじまるLGBTの祭典.
12) Brenna HardingとVicki Harding作，Chris Bray-Cotton絵，2005年にオーストラリアで出版された子供向き絵本.

文献

釜野さおり2008.レズビアン家族とゲイ家族から「従来の家族」を問う可能性を探る.家族社会学研究20(1):16-27.

釜野さおり2009. 日本における家族研究―クィア・スタディーズの視点からのサーベイ―.家族社会学研究21(2):188-194.

河口和也　2003.『クイア・スタディーズ』岩波書店.

陳思羽　2017. 在日定住中国人女性の居場所とホーム－ライフヒストリーの分析から－. お茶の水地理56:19-28.

福田珠己 2008.「ホーム」の地理学をめぐる最近の展開とその可能性―文化地理学の視点から―. 人文地理 60(4):403-422.

Barrett, C. 2015.Queering the home: The domestic labor of lesbian and gay couples in contemporary England. *Home Cultures* 12(2):193-211.

Bell, D. and Valentine, G.eds. 1995. *Mapping desire: Geographies of sexualities.* Routledge.

Blunt,A.2005. Cultural geography: Cultural geographies of home. *Progress in Human Geography* 29(4):505-515.

Blunt,A. 2017. Home. In *The international encyclopedia of geography: People, the earth, environment, and technology.* ed. Richardson,D.et al. John Wiley & Sons.

Blunt,A.andDowling,R.2006. *Home*. Routledge.

Brickell,K.2012. 'Mapping' and 'doing' critical geographies of home. *Progress in Human Geography* 36:225-244.

Browne, K.2007. Lesbian geographies. S*ocial & Cultural Geography* 8(1):1-7.

Browne,K.and Brown,G. 2016. An introduction to the geographies of sex and sexualities. In *The Routledge Research Companion to Geographies of Sex and Sexualities*, eds. K.Browne and G.Brown, 1-10.Routledge.

Buchli, V., Clarke, A. & Upton, D.2004. Editorial.*Home Cultures* 1 (1):1-4.

Castells, M.1983. *The city and the grassroots: A cross-cultural theory of urban social movements.* Arnold. カステル,M.著, 石川淳志監訳1997.『都市とグラスルーツ――都市社会運動の比較文化理論』法政大学出版局.

Domosh,M.1998. Geography and gender: Home, again? *Progress in Human Geography* 22(2):276-282.

Elwood,S.A. 2000. Lesbian living spaces. *Journal of Lesbian Studies* 4(1): 11-27.

Felsenthal, K. 2009. Creating the queendom: A lens on Transy House. *Home Cultures* 6(3): 243-260.

Friedman,A.T. 2015. Hiding in plain sight: Love, life and the queering of domesticity in early twentieth-century New England. *Home Cultures* 12 (2): 139-167.

Gorman-Murray, A. 2006. Gay and lesbian couples at home: Identity work in domestic space. *Home Cultures* 3(2): 145-167.

Gorman-Murray, A. 2007. Contesting domestic ideals: Queering the Australian home. *Australian Geographer* 38(2):195-213.

Gorman-Murray, A. 2008a. Masculinity and the home: A critical review and conceptual framework. *Australian Geographer* 39 (3):367-379.

Gorman-Murray, A. 2008b. Queering the family home: narratives from gay, lesbian and bisexual youth coming out in supportive family homes in Australia.*Gender, Place and Culture* 15 (1) :31-44.

Gorman-Murray, A. and Cook, M. 2017. *Queering the interior (home)*. Bloomsbury Academic.

Gorman-Murray, A., McKinnon, S. andDominey-Howes, D. 2014. Queer domicide: LGBT displacement and home loss in natural disaster ipact, response, and recovery. *Home Cultures* 11 (2) : 237-261.

Gorman-Murray, A.,Waitt, G. and Johnston, L. 2008.Guest editorial: Geographies of sexuality and gender 'Down under.' *Australian Geographer* 39(3):235-246.

Johnston, L.2016. Gender and sexuality Ⅰ: Genderqueer geographies? *Progress in Human Geography* 40(5):668-678.

Johnston, L. 2017. Queer geographies. In *The international encyclopedia of geography: People, the earth, environment, and technology.* ed. Richardson,D.et al. John Wiley & Sons.

Johnston, L. and Longhurst, R. 2008. Queer(ing) geographies 'Down Under':Some notes on sexuality and space in Australasia. *Australian Geographer* 39(3):247-259.

Johnston, L.and Valentine,G. 1995. Wherever I lay my girlfriend, that's my home: The performance and surveillance of lesbian identities in domestic environments. In *Mapping desire: Geographies of sexualities*, ed.D.Bell and G.Valentine, 99-113.Routledge.

Kamano,S. 2009.Housework and lesbian couples in Japan: Division, negotiation and interpretation. *Women's Studies International Forum* 32:130-141.

Kentlyn, S.2008. The radically subversive space of the queer home: 'Safety House' and 'Neighbourhood Watch' *Australian Geographer* 39(3):327-337.

Lewis, N.M. 2017. Sexualities. In *The international encyclopedia of geography: People, the earth, environment, and technology*. ed. Richardson,D.et al. John Wiley & Sons.

Luzia,K. 2008. Day care as battlegropund: using moral panic to locate the front lines. *Australian Geographer* 39(3):315-326.

Pilkey,B. 2014. Queering heteronormativity at home: Older gay Londoners and the negotiation of domestic materiality. *Gender, Place & Culture* 21(9):1142-1157.

Pilkey, B. 2015. Reading the Queer Domestic Aesthetic Discourse: Tensions between celebrated stereotypes and lived realities. *Home Cultures* 12(2):213-239.

Pilkey, B., Scicluna, R.M., and Gorman-Murray, A. 2015. Alternative domesticities: A cross-disciplinary approach to home and sexuality. *Home Cultures* 12(2):127-138.

Scicluna, R. 2015.Thinking through Domestic Pluralities:Kitchen stories from the lives of older lesbians in London. *Home Cultures* 12(2): 169-191.

Scicluna, R. 2017. *Home and sexuality: The 'other' side of the kitchen.* Palgrave.

Tunåker, C. 2015. "No place like home?": Locating homeless LGBT youth. *Home Cultures* 12(2):241-259.

Valentine, G.1993. (Hetero) sexing space: Lesbian perceptions and experiences of everyday spaces. *Environment & Planning D: Society & Space* 11:395-413. バレンタイン,G.著,福田珠己訳1998.(異) 性愛化した空間―日常空間に対するレズビアンの知覚と経験―. 空間・社会・地理思想3: 77-95

Valentine, G. 2000a. Introduction: From nowhere to everywhere: Lesbian geographies. *Journal of Lesbian Studies* 4(1):1-9.

Valentine, G. 2000b. "Sticks and stones may break my bones": A personal geography of harassment." *Journal of Lesbian Studies* 4 (1): 81-112. (初出*Antipode* 30(4):305-332,1998)

Wincapaw, C. 2000. The Virtual spaces of lesbian and bisexual women's electronic mailing Lists. *Journal of Lesbian Studies* 4 (1): 45-59.